

## SPECIAL REPORT

# 酪農乳業が一堂に会して 復興支援の集い開催

日本酪農乳業協会（Jミルク）は7月13日、東京のサンケイプラザホールで、「震災からの復興・再生を共に目指す酪農乳業の集い～“みんなが元気に！”ミルクプロジェクト」を開催した。集いには、東日本大震災で甚大な被害を受けた酪農乳業関係者50人のほか、昨年の口蹄疫で被害を受けた宮崎県の酪農家10人など全国の酪農乳業関係者400人が参加し、その模様はインターネット等を通じて世界に発信された。

集いでは、震災で犠牲となった関係者への黙とうが続いて、高野瀬忠明Jミルク会長が「集いの目的は、東日本大震災における酪農家・乳業者・牛乳販売店などの被災の実態や復旧の苦勞、復興・再生への想いを業界全体で共有し、全国の酪農乳業関係者が被災地への支援や激励の意思を共に確認することを通して、酪農乳業界の『キズナ』や『共同して課題に取り組む』意識を強めること」、「この集いを機に、牛乳乳製品のサプライチェーンの安定に向けて業界が懸命になって取り組んでいること、被災地の栄養改善において牛乳が重要な役割を果たしていることなどの情報発信を通じて、消費者との信頼確保、牛乳乳製品の価値向上の促進を図っていく」と主催者あいさつした。

来賓あいさつに立った吉田公一農林水産大臣政務官は、「酪農乳業関係者による牛乳乳製品のサプライチェーンの懸命な復旧努力に感謝する。酪農乳業が一体となって震災からの復興・再生を誓うことは意義深いことであり、集いを契機に絆を深めて欲しい」と述べた。続いて、前田浩史Jミルク専務が、東日本大震災からの復興の現状と課題について基調報告した。前田専務は、地震と原発事故による酪農乳業への直接的な影響の大きさを報告するとともに、Jミルクが震災

後に実施した調査によって、震災体験によって国民のライフスタイル、消費者の食品や牛乳に対する態度や意識が変化したことなどが明らかとなったと述べ、牛乳乳製品市場の混乱を防止するため、酪農乳業が分かりやすい情報を発信することの重要性を強調した。

次に、「被災地からの声」と題する酪農乳業関係者のインタビュー映像が放映され、被災地の酪農家を代表して但野忠義福島県酪農協組合長、乳業者を代表して二瓶孝也会津中央乳業社長、牛乳販売店を代表して佐藤宗男有限会社入間社長が厳しい実情を訴えた。

また、全国の酪農乳業関係者、宮崎県口蹄疫被災酪農家、医師、栄養士、教育関係者、消費者団体などから、被災地に向け激励のエールが送られた。酪農団体を代表して茂木守本会議会長は「酪農はこれまでも、数多くの困難を乗り越えてきた。関係者が一丸となって難局を乗り越えよう」、古川紘一日本乳業協会会長は、「生・処・販が互いに力を合わせ、オールジャパンで復興・再生を図り、安全と安心を確保して酪農乳業の持続的発展を確たるものとする」、松尾和重全国牛乳流通改善協会会長は「今後とも商品だけではなく、安全・安心を届け、東北とともに全国の販売店が一緒になって頑張っていきたい」と、復興・再生に向けて共に歩む決意を示した。

最後に、「如何なる時でも、ミルクの価値を通して、日本人の健康と食生活に貢献できるよう、ミルク・サプライチェーンの安定に努める」、「消費者の方々の信頼にしっかりと応えるため、ミルクが放射能の基準値を超過することがないように厳格な管理を行い、これからも、安全で安心して頂ける牛乳乳製品を供給する」、「被災地の仲間たちを励まし、支え、一刻も早い震災からの復興と再生を共に目指す」を内容とする共同宣言が、酪農家代表の高橋日出代さん、乳業者代表の佐々木理順さん、牛乳販売店代表の瀧上亜里佐さんら3人によって読み上げられ、満場の拍手で採択された。

